

開けずの箱

吉備中央町には、加茂大祭や吉川八幡宮の当番祭と、県下でも有名なお祭りがある。

その当番祭が行われる吉川八幡宮ができた頃の話じゃ。

昔、吉川にお宮を建てることになり、村の人達が集まって相談したんじゃ。

「ここにはないような、りっぱなお宮を建てようじゃなかい」

「うん、そりゃあええ。どこかに、りっぱなお宮を建てられるような

大工がおらんじゃろうか」

「なんでも飛騨の匠という名高い大工がおるそうじゃ。

その人に頼んでみようや」

飛騨の匠は、釘を使わずに家を建てるという、

それは腕のいい大工だったそう。

村人の代表として世話役の人が飛騨(岐阜県の北部)へ

お願いに行くことになったんじゃ。

大工は、「よろしい、やらせていただきます」と引き受けてくれたんじゃと。

しばらくして、大工は弟子を一人だけ連れて吉川へやって来た。

村人は、〈これでお宮が建てられるんじゃろうか〉と心配していたが、

見ていると、大工はすぐに小屋へ大きい木を入れて仕事を始めたんじゃ。

ゴーリゴーリ、カッツカッツ、コッツコッツ、と、

のこぎりや槌の音が聞こえるばかりじゃった。

次の日、いっしょに来た弟子とは違う男を連れて小屋から出て来た。

その男はすぐに仕事を始めたんじゃけど、その速いこと速いこと。

目が回るような速さでお宮を建てていった。

それを見ていた村人が、

「ありゃりゃ、ありゃ。あの男の目を見てみ、じっとして動かんぞ。

どうしてじゃろうか」

その壺

開けずの箱

男の目の玉は魚の目のように一点を見つめて動かんかったもんじゃから、
みな不思議に思ったと。

仕事は予定より早う進み、やがてりっぱなお宮ができあがった。
村の人達は大喜びで、さっそくお祝いの酒盛りをはじめようとしたんじゃ。
そこへ大工が、白木の箱を持って出て来た。

「この箱の中には、とても大切なものが入っていますから、
決して開けてはいけません。神様の側に置いて祭ってください」
とって、村人に箱を渡すと、帰っていったそう。

お宮を建てたのは、大工が最初に作った目の動かん、木の人形で、
箱には、その人形が入っているのではないかと言われ、
今でも大切に祭られているのじゃと。

再話 難波 順子

【吉備中央町のむかし話 岡山「へその町」の再話集 より抜粋】

その二